

巻頭言

来るプログラムマネジメントの時代に向けて

広島修道大学 佐藤 達男

P2M は、2001 年に日本発のプロジェクト&プログラムマネジメント標準として発刊されました。これには 20 世紀のマネジメントの知識と実績の総まとめという意味合いがあったとも考えられますし、来る 21 世紀に向けた新たなマネジメントの形を提示するという意味合いが込められていたと受け止めることもできると考えています。ただ、発刊当時の日本におけるプロジェクトマネジメントの事情は、2003 年 12 月に日経コンピュータに特集された「システム開発プロジェクトの成功率は 3 割」という衝撃的な記事に代表されるように、IT 分野の大規模なプロジェクトにおけるマネジメントのノウハウが大幅に不足しており、各所で大きなトラブルが相次いで発生していたという危機的な状況でした。そのような時期に受託型のプロジェクトマネジメントの知識体系として、米国 PMI が発刊する PMBOK が紹介され、IT 業界を中心に急速に普及・浸透していきました。このような背景があり、発刊当初の P2M は、PMBOK と比較すると知名度は高いとはいえ、普及・浸透には苦慮する場面も多かったと推察します。これはあくまで私見ですが、P2M は時代を先取りしていたと考えています。

つまり、発刊当時は P2M のコンセプトに時代が追い付いていなかったのではないかということです。2000 年代後半になると、スマートフォンが登場してコンピュータの UI (ユーザーインターフェース) が変わり、クラウドコンピューティングによってコンピュータのメモリーによる制約から解放されることにより、IT を中核としたライフスタイルが一気に変わってしまった。そして、ロボティクス、AI、IoT など IT とさまざまな産業分野がシームレスに連携することが当たり前の時代を迎えて、異なる分野の複数プロジェクトを有機的に連携することによって、大きなミッションを達成するプログラムマネジメントの役割は、これからますます重要になってくると考えられます。国際 P2M 学会では、近年は環境問題、国際協力、地域活性化などさまざまなテーマの研究発表が行われています。まさにいま、そしてこれからがプログラムマネジメントの時代であり、筆者も国際 P2M 学会の一員として時代の潮流をとらえ、学会の発展に寄与していきたいと考えています。

2019 年 7 月 15 日受理